期待の若手シリーズ

私にも言わせて！ 第147回

小児科医として保健所で働くこと

鹿児島県徳之島保健所の渋谷謙一医務技師からバトンを受け取り、まだ日が浅いものの〝私にも言わせて〟いただくことになりました。臨床から行政へ。保健所のことをまったく知らないまま飛び込んだ先で、たくさんの学びがある日々を過ごしています。

鹿児島県鹿屋保健所 兼
志布志保健所　医務技師
井無田 萌

鹿児島県鹿児島市出身。平成29年3月鹿児島大学医学部医学科卒業。鹿児島大学病院で初期研修医を修了し、31年4月鹿児島大学病院小児科入局。その後、鹿児島県立北薩病院、済生会川内病院、種子島医療センターでの小児科勤務を経て小児科専門医を取得。令和5年10月から現職。

小児科医になるまで

子どもの頃から漠然と抱いていた医師になるという夢。鹿児島大学医学部医学科に地域枠学生として入学後、素敵な仲間に支えられてその夢がかなった時に選んだ診療科は小児科でした。もともと子どもが特別に好きだったわけではなく、学生時代には小児科の講義や試験は苦手だったとも記憶していますが、ポリクリ（外来実習）で回って以来、その成長・発達からさまざまな疾患まで幅広い分野をカバーするところに引かれていきました。

入局してから小児科専門医を取得するまでに大学病院と市中病院を幾つか経験し、その中には小児科が1つしかない地域もありました。一次医療はもちろんのこと、予防接種や市町の乳幼児健診、学校医などを経験する中で、体調不良の子どもだけではなく身体的に元気な子どもたちとも触れ合い、その家族や学校などの背景に頭を悩ませることもありました。しかし、異動で短期の関わりになるばかりで、診察に来たタイミングの一瞬一瞬でしか関われないことにもどかしさを感じることもありました。

ところで、私自身は「備えあれば憂いなし」「石橋は（これでもかというほど）たたいて渡る」というタイプであり、かなりの慎重派であると自負しています。このことがなかなか一歩を踏み出せないフットワークの重さにもつながっていて、自分では長所と短所のどちらも兼ねていると思っています。しかし今回、保健所勤務の選択肢が巡ってきた時には、ふと、この機会を逃せないと感じました。臨床現場は楽しくてやりがいがあるし、小児科専門医の資格を取ったばかりだし、まだまだ学びの途中でもっとスキルアップしたい…。保健所のことはよく知らないし、なじみのある臨床現場で働きたい…。いろいろな思いが浮かびましたがそれでも、この機会を逃したらもう保健所との縁は巡ってこないかもしれないと思い、飛び込む気持ちで勤務を希望しました。

勤務が始まるまでの準備段階で県の方々から受けたアドバイスの中でも、「異動ではなく転職のつもりでいてください」と言われたのが印象的でした。どんな日々が始まるのか想像もつきませんでした。

保健所とはなんぞや

そもそもは、私が地域枠卒業医師であることが保健所との縁でした。本県で、地域枠卒業医師が卒後の義務履行期間中に保健所で勤務できるようになったのは、ここ最近の話で前例も多くありません。「保健所とはなんぞや」。その答えを知る人は身近におらず、ただ小児科の複数名の先輩方が進んでいる道と聞き及んでいましたので、何となく診療科として相性がいいのではないかと感じていました。しかし、先にも述べた通り、臨床しか知らない、その臨床すらも専門医の資格を取りたての今からという時期に、保健所勤務を経験すると決めるのには葛藤がありました。また保健所については、印象も薄く未知の世界で、新型コロナウイルス感染症が流行するまでほとんど関わることはありませんでした。それまでの私は恥ずかしながら、県内に保健所が何か所あるのかさえ知らなかったのです。保健所とはなんぞや。学生時代の公衆衛生学の記憶を引っ張り出しても全然思い出せないまま勤務が始まりました。

保健所勤務開始！

さて、鹿屋保健所と志布志保健所は鹿児島県東部の大隅半島にあり、鹿屋保健所は本所として2市4町を管轄し、その支所である志布志保健所は2市1町を管轄しているので、計9市町を管轄しています。面積も広大で県全体の約23％を占め、また高齢化率の高い地域です。両保健所を兼務という形で配属されましたが、実際、最初の半年間は実務研修として鹿屋保健所をメインに、そしてその後は志布志保健所をメインにする、という形で勤務することとなりました。

鹿屋保健所での働き始めは、さまざまな係の業務や事業にとりあえず参加してみて、流されるままに、行政のやり方や公衆衛生の考え方など臨床とは違う空気を肌で感じました。慣れないデスクワークに右も左も分からない手探り状態で、知らない事柄も多く戸惑いがありましたが、初めて出合う事柄を一つ一つ調べて知っていく作業は、まるで学生時代に戻ったかのようでした。

訪問に同行したりケース会議に参加したりするときには、小児科医や臨床医としての知識や経験が生かされる機会があり、自分でも役に立つと安心しましたし、まったく未知の分野では学ぶことがたくさんあり、ワクワクしました。また、今までの生活でこれほどまでに法律を読み込んだこともなかったと思います。そして、保健師さんをはじめとした職員の皆さまに支えられながら、ようやく見よう見まねで事業を任せてもらうようになると、新たな大変さもありました。多くの学びを得ながら貴重な経験をさせていただいたと思います。

支所である志布志保健所がメインとなってからは、本所とはまた違った雰囲気で、小規模な事務所で一人ずつが複数の分野を担当し、ただ自分の担当というよりは皆で全体をカバーしていることに驚きました。おのおのがいろいろなことを担当しながらも突発事例には皆で取り組む姿勢に、流されるままだった私もいつしか自分の意見を持って行動するようになっていました。さまざまな分野でたくさんの人に出会い、意見を交換し合うことで、これからもより深く学んでいけると感じています。

小児科医であること

今も、管轄外の地域ではありますが、月2回は小児科の病院で診療に携わっています。保健所勤務を決めた時から、臨床から完全に離れるのが不安で、少しでもつながっていたいという思いがありました。しかし、志布志保健所へ赴任したのが偶然、管内唯一の小児科が閉院したタイミングだったため、出会う方々との会話の中で臨床の小児科医として求められていることが伝わってきて、管轄外で診療をしていることを考えると心苦しく思うこともありました。小児科医として保健所で働くこと。臨床では臨床の、行政では行政の視点があり、どちらの視点も持ち続けたまま相互に生かしていけたらと思っています。

保健所とはなんぞや。このことを理解するのはいつになるか分かりませんが、周囲の方々への感謝を胸に日々精進してまいります。今まで出会った皆さまとこれから出会う皆さまへ、今後ともご指導ご鞭撻（べんたつ）のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。